平成２１年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
１　「勉学を第一義とする」をふまえ、高い学力を身につけ進路志望の実現を図る。 ・１時間の授業の大切さを意識し、意欲的に取り組む。	①　学校評価を年２回実施しその結果を検討・分析して今後の学習活動の改善・向上に役立てる。	判断基準が、「よくあてはまる」と答えた割合が前年度より A　１０%以上増加した。 B　５%以上増加した。 C　ほとんど変わらなかった。 D　減少した。	C 良くあてはまる。 ５３%→５４% やや あてはまる。 ４２%→４１%	「良く努力している。」「努力している。」を合わせると９５%となり、保護者から概ね高い評価を得ているが、さらなる工夫・努力をしてゆきたい。 この取組に関しての目標および目標設定数値等については再検討する必要がある。
	②　教科として授業改善に取り組む。校内研究授業では、教科として目標を設定し取り組む。教員同士の授業参観をより積極的におこなう。	生徒による授業評価の「授業が充実している」の評価の平均が A　３．４以上 B　３．３５以上 C　３．３以上 D　３．３未満 （昨年度は３．３）	B 生徒による授業評価 （１２月実施） の評価の平均が ３．３７	生徒による授業評価の「授業が充実している」の評価の平均は ３．２８（昨年度７月）→３．３１（昨年度１２月）→３．３６（今年度７月）→３．３７（今年度１２月）と推移しており、着実に授業改善の成果が現れていると考える。今後は、各教科単位の授業改善の取り組みを、更に充実させていきたい。
	③　基礎力の充実を大前提とした上で、難関大入試分析や東大・京大・医学部説明会等の充実を図る。また、受験集団としての意識を高める工夫をしていく。	東京大学・京都大学の合格者の合計人数が、 A　３０人以上 B　２５人以上 C　２０人以上 D　２０人未満	C （参考） 東大合格数７名 （文系３、理系４） 京大合格数１４名 （文系４、理系 10）	３年学年団との協議で、①平日補習を曜日別希望者制に、②最終登校日後の理数特別補習の実施、③センター後補習の理系小論を後期だけに絞るなど、指導をより実態に合ったもの変更した。 また、職員向け東大入試問題研究講座、３年１１月末進路講話など、時節に合った取り組みを実施した。 東大京大を中心とした６月からの添削指導については、方法・効果の検証が必要だが、現１・２年は基礎力と教科バランスを重視した指導を継続しており、次年度へつながるものと考える。
	④　学習の柱となる授業の内容をいっそう充実させるとともに、補習や個人添削を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせた指導を時機を逸することなく実施する。	難関１０大学及び国公立大学医学科の合格者数が A　１２０名以上 B　１００名以上 C　　８０名以上 D　　８０名未満	D 難関１０大学及び国公立大学医学科の合格者数 ７７名	従来実施していた東大・京大・医学部志望者説明会を難関１０大学に拡大し、志望校別情報交換会「チャレンジクラブ」を立ち上げた。総体終了後、夏季補習中、記念祭終了後、センター試験終了後のタイミングで４回実施し、学習計画の見直しや教材の提示等で生徒に具体的な指示をすることができた。 センター試験は善戦したが、成績がＢラインを超えていても、二次力に不安を残したままチャレンジし、失敗したケースが見られた。今後は早めに記述の力を意識させる必要がある。
	⑤　ホーム担任および学年主任は、全国規模の校外模試で具体的な目標得点を設定した上で受験するよう、全生徒に対し、年間５回以上の個別面接指導を実施する。	学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A　９０%以上 B　８０%以上 C　７０%以上 D　７０%未満	１年　　A ９３．４% ２年　　A ９２．８%	４月以来、学年集会はもちろんのこと、進路だより、学年だより等を通して学力向上に向けた意識付けを行ってきた。また、始業前や休み時間を利用した課題学習（英・数・国）、定期試験前の質問教室を実施することにより、自主的に学習する習慣付けを図ってきた。今後はさらなる飛躍をめざして指導していきたい。 個別面談、進路だより、学年集会等を通して、目的意識や進路意識の向上に努めた。また、国数英において小テストや基礎力確認テストで基礎基本の徹底を図った。後期から、個々の学力レベルに応じた課題も提示して中位層の底上げと、最上位層の育成を図ったが、この取り組みの流れを次年度へもつなげていきたい。

学校関係者評価委員会の評価	・きめ細やかな指導をしていると評価している。将来の目標がはっきりしている生徒ほど意欲的に学習に取り組めるので、学校の中で、目先のものではなく大きな目標を生徒ひとりひとりが持てるように指導してほしい。 ・能力の高い生徒が集まる学校だから、そのひとりひとりの高い能力に注目した指導をしてほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策	・生徒による授業評価の分析や校内研究授業等を教科単位で更に充実させていく。 ・１年からの基礎基本の徹底が最終的な進路実現の大きな力となるので、３年間を見通した系統的な指導に努める。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
２「品位を高め、他の人格を重んずること」をふまえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。 ・挨拶の励行、成果ある部活動と充実した創立記念祭の取組。	①　挨拶をきちんと行うことにより、相手を尊重する態度の育成を図る。教育活動のあらゆる機会を通して、しっかりした挨拶の実行を促す。	自分自身がしっかりと挨拶をしていると答えた生徒(主観的評価)と、周りの生徒の挨拶がしっかりできていると感じる生徒（客観的評価）がそれぞれ A　９０%以上いる。 B　８０%以上いる。 C　７０%以上いる。 D　７０%未満である。	B 主観的評価のうち肯定的評価が ９０．９% また、 客観的評価のうち肯定的評価が ８８．４% だった。	前年度は主観的評価が９０%を超えたため、今年度は客観的評価のアンケートを実施した。単純に比較はできないが、19 年度の客観的評価の結果よりも肯定的評価が高くなっているので、周りの生徒の挨拶がしっかりできていると感じる生徒が増えているようである。 登校指導時など、挨拶をしない生徒がいないのは確かであるが、声が小さく元気の無さを感じることも少なくない。 来年度に向けては、より大きな声で、元気よく挨拶するよう促していく工夫が求められる。
	②　部活動の活性化、競技力の向上を図る。	総体総合順位が A　３位以上 B　６位以上 C　９位以上 D　１０位以下	C 総体総合順位 男子　８位 女子　１４位 総合　７位	最終的な総体総合順位は、総合７位で、昨年度よりも順位を上げている。 団体では男子ハンドボールの優勝をはじめ、３位以内に入賞した部活の数は昨年度なみであった。また、個人種目では、夏季の水泳種目での入賞者が目立った。夏季大会までの暫定順位は総合５位で、目標の６位以内の期待が高まったが、冬季大会の成績が振るわなかった。今後さらに部活動の活性化にむけた取り組みを進めていきたい。
	③　利用しやすい図書館をめざす。読書時間調査や読書傾向を掴み読書量の増大を図る。	１年間（１月末現在）の本の貸出し数が、 A　4500 冊以上 B　4000 冊～ 4449 冊 C　3500 冊～ 3999 冊 D　3500 冊未満	C １月末で、3520 冊（開館 165 日）。 昨年同時期で、3739 冊。（開館 171 日） （３月末で、4284 冊）	生徒への本の貸し出し数は、昨年より少し減少したが、開館日数当たりでは、ほぼ同じ。学年別では昨年より３年生が増え１年生が減少している（１年：718 冊、２年：1458 冊、３年 1344 冊）。 校内読書会、図書便りなどを利用して、さらに図書館活動や蔵書のアピールをし、閲覧室の特設コーナーをこまめに更新・充実させ、入館者を増やし、貸し出し数増加に繋げていきたい。 図書館の蔵書のパソコン検索の実施、バーコードによる貸出業務の効率化に向けた取り組みも進めていきたい。
	④　部活動と勉学の両立をめざす。時間のけじめや、社会規範を身につけさせる。	学年団の指導が、自分の規範意識向上に役立ったと考える生徒の割合が学年全体の、 A　８０%以上 B　７０～８０% C　６０～７０% D　６０%未満	A 年末の調査において　８３．４%	９月までの１日当たりの遅刻者数の平均値は、３．０を下回ったが、後期になって徐々に増加した。各担任はその都度指導したが、特定の生徒が遅刻を繰り返した。回数の多い生徒については、今後も生徒指導課と連携し指導を強化する必要がある。次年度は、家庭との連携も密にし、遅刻防止に取り組むとともに、、高校生活全般における規範意識の向上を図っていきたい。
	⑤　自立心の育成をめざし、いち早く高校生活に慣れさせる。	学年団の指導が、学校生活を有意義に送るために役立っていると考えている生徒の割合が A　９０%以上 B　８０%以上 C　６０%以上 D　６０%未満	A 前期末の調査において　９３．４%	１月末現在での遅刻者数（１日あたり）の平均値は、１．９となっており、２０年度の２．１、１９年度の３．９と比較するとかなり低くなっていることが分かる。これは、学年ぐるみの活動として「朝学習」を実施しており、それが効果的に機能していることの証だと思われる。昼夜逆転の生活が、生徒の不登校につながりやすいことを考えると、朝型の生活スタイルが健全な学校生活に欠かせないことが分かる。今後とも継続していきたい。

学校関係者評価委員会の評価	・自立した生徒、自ら考える生徒を育てて欲しいが、この点では、図書館の役割は重要で、蔵書を増やすと同時に図書に親しむ指導も必要だと考える。 ・「社会人と語る会」等で本校出身者の業績を知り、泉丘生としての誇りを持たせることは大切だが、「人生うまくいかない」ような事例も必要ではないか。
学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策	・読書指導を充実させることで情操を豊かにし、様々な見方・考え方ができる生徒を育てる。 ・ボランティア活動や環境美化、挨拶の励行等に積極的に取り組むことで、「ふるさとを想ういしかわのリーダー」としての資質を育てる。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
３ 「正義を愛し、社会から信頼されること」をふまえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。 ・保護者懇談会、授業公開の機会拡大。地域社会と連携した生徒活動の推進。	① PTA 総会時の土曜エクステンションスクール泉丘や「いしかわ教育ウィーク」を中心として、授業公開を積極的に行う。今年度は、教員同士の授業参観期間(前期・後期にそれぞれ５週間)にも授業公開を実施する。	保護者による学校評価の「教職員は、指導力に優れ、信頼できる」に対し、「よくあてはまる」及び「ややあてはまる」と答えた保護者の割合が A 95 %以上 B 90 %以上 C 85 %以上 D 85 %未満	B 「よくあてはまる」 ４８% 「ややあてはまる」 ４６% 合計９４%	授業参観した保護者の人数が、１５１９人（PTA 総会 611 ＋体験入学 180 ＋中学校 PTA 訪問 574 ＋いしかわ教育ウィーク 154）であり、過去２年間の年間の参観人数（一昨年度７５５人、昨年度８８１人）を大きく上回っている。保護者のみならず、他の高校からの授業参観も頻繁に行われており、適度な緊張感を生んでいると考える。　一方、保護者による学校評価の「教職員は、指導力に優れ、信頼できる」に対しても肯定的な評価が 94 %に達している（昨年度は 93 %）。 今後は、更に積極的に授業公開を進め、研究授業や教員同士の授業参観の充実と連動させ、授業の質や評価の向上を図っていきたい。
	② 生徒、及び保護者が気軽に来室でき、安心して相談できる環境作りを一層進めていく。	生徒・保護者に対して「相談室だより」を年間で、 A ５回以上出した。 B ４回出した。 C ３回出した。 D ２回以下しか出せなかった。	B 4月・5月・9月・１２月に４回発行	４月当初・５月初旬・９月初旬・１２月初旬の計４回、相談室からの発信を行った。（１２月のものは図書課と共同）５月のものは１年生対象のアンケート形式のもので、約８割の生徒が回答紙を持って来室し、相談室員と言葉を交わした。問題を抱える生徒の早期発見につながったケースもあり、生徒と相談室の距離を縮めるものとして有効であったと思われる。 次年度においても、相談室がさらに気軽に来室できる場となるように、生徒の実情をとらえた発信を行っていきたい。
	③ ＩＳＯ活動「節電・紙の節約やリサイクル・ゴミの分別」を通して、環境保全意識の向上を図る。	生徒の「環境意識・地域での活動」の自己評価全体に占める肯定的評価（「よくあてはまる」と「だいたいあてはまる」の合計が A 80 %以上 B 70 %以上 C 60 %以上 D 60 %未満	B 環境保全活動に対して、肯定的評価は全校で 817 名(77%)であった。(12 月実施の生徒アンケート)	学年別でみると「あてはまる」と答えた生徒は、学年進行につれて増加し、逆に「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の否定的評価は、学年進行につれて減少する傾向を示している。 昨年比、肯定的評価は 5 ポイント増加、否定的評価は 4 ポイント減少した。 現在行われている取り組みを継続するとともに、リサイクルボックスやゴミ箱の設置のあり方を、再度、見直すことが必要と考えられる。
	④ ホームページの更新を定期的に行い、各種行事・部活動・ＳＳＨの様子や教育課程・進路などの情報を校外へ発信し、よりわかりやすく公開する。	「学校のホームページにより、学校の様子がわかる。」という項目のよくあてはまるとややあてはまるを合わせた割合が、 A 90 %以上である。 B 80 %以上である。 C 70 %以上である。 D 70 %未満である	B よくあてはまる ３１% ややあてはまる ５３% 合計８４%	学校の様子がわかりやすく伝わるよう、写真や図表を多く取り入れたホームページを心がけている。行事等の実施時期とｗｅｂへのアップロード時期の時間差をできるだけ少なくするよう、各課室にデータの提供を迅速化するよう働きかけていきたい。 学校ホームページにアクセスしたことがある割合は、昨年度の５４%から今年度は６７%に増加している。これをうけて、今後は、本校として伝えるべきコンテンツは何なのかを再検討し、学校経営戦略上の価値を高める必要がある。
	⑤ 創立記念祭で、理数科１年生が近隣の小中学生に対して理科教室を開き、地域貢献を図る。	創立記念祭中の教室の来客数が、 A １００人以上 B ７５人以上９９人以下 C ５０人以上７４人以下 D ４９人以下	A 来客数 １３０人超	人間一人を乗せて動くホバークラフトを製作すると聞き、材料となる浮き輪と台となる厚い板を見た。その厚い板と人間を掃除機一つで浮かすことは不可能だと思ったが、理数科の生徒たちは、あきらめずに制作し、完成させた。ホバークラフトは、空気砲、スライム作り、カルメ焼き作りなどと共に来場者に大変、好評で、理数科の生徒たちは、達成感を感じることが出来た。後期はコスモサイエンスＩを受講し、科学する心がますます育ったと思われる。

学校関係者評価委員会の評価	・開かれた学校づくりに関しては、目標は概ね達成されている。 ・ＳＳＨの成果を積極的に地域の中学校、小学校に還元していくことも大切である。
学校関係者評価委員会の評価結果をふまえた今後の改善策	・学校周辺の清掃等のボランティア活動に取り組むなど地域社会から信頼される学校を目指す。 ・ＳＳＨの成果を地域の中学校等に還元する取り組みを積極的に推進する。